

OVERSEAS DISPATCH REPORT

女性研究者海外派遣報告書

No. 3

国立大学法人 宇都宮大学

ダイバーシティ研究環境推進本部

女性リーダー育成オフィス



◎ はじめに

宇都宮大学は、平成30年に文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」に採択されました。本事業の特色は、海外留学等を通して研究力をつけた女性教員を積極的に上位職に登用することをめざす点にあり、本学では平成30年度に1名、令和元年度に10名の若手・中堅女性研究者の海外派遣を行い、令和2年度はオンラインにて7名を海外派遣いたしました。本報告書は、令和2年度オンラインでの派遣者7名の方の報告を掲載しています。

研究者にとって、ある程度まとまった期間海外で研究を行うことは、研究力向上やキャリアアップに有効であるだけでなく、異文化体験による視点や視野の広がり、海外ネットワークの構築など大きな意味があります。しかし、職場を離れることへの遠慮もあり、なかなか自分から言い出せず、特に長期の留学には躊躇する方も多いのではないのでしょうか。

本事業では、支援額に旅費、派遣先での研究費に加えて、派遣に伴う代替教員の人件費も含まれる、という手厚い支援体制となっており、このことにより潜在的に要望を持っておられた多くの女性教員の留学が実現しました。

帰国後には、報告会を行って若い世代への波及効果を与えると同時に、新たに開発するキャリアパスプログラムを実施して、女性教員がライフステージに応じて個性と能力が存分に発揮でき、優れたリーダーが一人でも多く誕生してくれることを期待しています。

ダイバーシティ研究環境推進本部長 藤井 佐知子

INDEX



2 鄒 艶華

工学部・基盤工学科・准教授



イギリス

6 松井 貴子

国際学部・教授



チェコ

10 松島 さくら子

共同教育学部・教授



タイ
ミャンマー
ベトナム

14 熊谷 朋子

就職・キャリア支援センター・准教授



カナダ

16 高山 道代

国際学部・国際学科・准教授



チェコ

18 立花 有希

国際学部・講師



ドイツ

20 戚 傑

国際学部・教授



アメリカ

23 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業(先端型)活動報告



※所属・職位については、留学時点のものです。



鄒艶華

しゅう えんか

工学部・基盤工学科・准教授



イギリス

派遣先機関

Brunel University London

派遣先期間

令和2年7月18日～9月13日

住所

Kingston Ln, London, Uxbridge UB8 3PH

研究テーマ

微細複雑部品の精密加工及び評価に関する研究

◎ オンラインでの海外派遣事業のよかった点はありますか？

新型コロナの影響で海外派遣先のイギリスのブルネル大学に行けなかったのはとても残念ですが、オンラインでの海外派遣事業の支援を受けてよかった点もあります。それは、旅費と滞在費を多めに占めている支援経費がすべて研究費に転換されたおかげで、念願の新しい実験装置の製作ができ上がったことである。



機械が運んできた様子



機械の設置

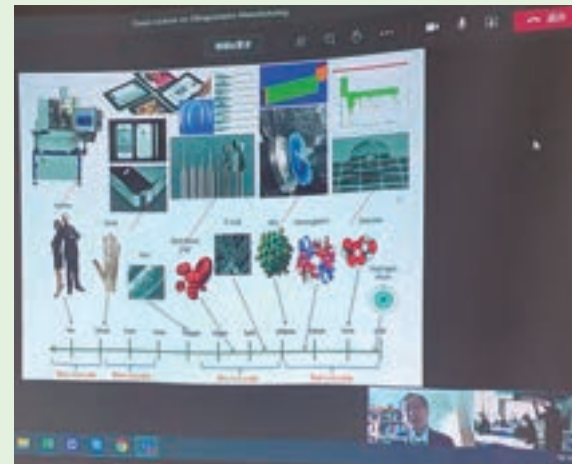


完成した実験装置

◎ オンラインでの海外派遣事業のやりにくかった点、苦労したことはありますか？

今回の海外派遣事業でブルネル大学KaiCheng教授の研究室で、微細複雑部品の超精密加工実験を行うことを計画していました。その中に、まず加工対象に合うモデルを選択し、シミュレーションで加工結果を予測することも計画していました。しかし、現地に行けなかったのも、シミュレーションでの予測の実施ができなかった。そして、現地での微細加工に関する実験研究が行えなかった。

そのため、オンラインによる技術交流を深め、文献交流も行った。また、オンライン研究会を数回開いた。



オンラインで交流している様子

◎ 将来留学を考えている人達へ

未知の世界に対する恐怖感があると思いますが、恐れずに十分に準備して、外の世界を体感しながら、自分をよく知ようになり、将来の夢を見つける気陰になる可能性もある。

オンライン留学先から先生へ

新型コロナの影響で来られなかったのは残念ですが、今後機会がありましたら是非来てください。お待ちしております。



ロンドン市内祭りの様子



ブルネル大学キャンパス内

微細複雑部品の精密加工及び評価に関する研究

鄒 艶華(准教授)
Yanhua Zou
宇都宮大学 工学部
yanhua@cc.utsunomiya-u.ac.jp

1. はじめに

近年、半導体分野、自動車・医療機器分野などの各分野で使われている機器の小型化、微細複雑化が進み、超精密微細加工技術が求められている。特に、高精度・低コスト化の超精密微細加工技術の開発が重要な課題である。

受け入れ先のKaiCheng教授は、長年で微細研削加工原理の理論解析、微細複雑部品の精密加工、加工精度制御理論、シミュレーションモデルによって予測、及び精密測定評価など様々な斬新な研究開発を行ってきた。今回の機会でブルネル大学KaiCheng教授の研究室で、微細複雑部品の超精密加工を実現することを目標としている。まず、加工対象に合うモデルを選択し、シミュレーションで加工結果を予測する。そして、予測した良い結果の実験条件で実際の微細複雑部品の精密加工を行う。さらに、実験結果の理論値と実験値の差が出る原因を解析する。最後には、私たちが得意とする磁性流体研磨法を利用して、精密研削で加工した微細複雑部品をさらに精度を上げ、超精密微細複雑部品の加工方法が達成できることを期待している。

しかし、新型コロナの影響で海外派遣先のイギリスのブルネル大学に行けなかったため、予定とおりの研究を行えなかった。こんな大変な状況の中、オンラインでの海外派遣事業の支援を受けて、オンラインによる技術交流を行い、文献交流も行った。また、新しい微細複雑部品を精密加工できる実験装置を立ち上げ、詳細な研究を行った。

2. 派遣先と派遣期間

派遣期間：令和2年7月18日～9月13日（58日間）

オンライン派遣期間：令和2年12月1日～令和3年2月28日

国・派遣先機関：イギリス・ブルネル大学

Brunel University（ブルネル大学）は、1966年に設立され、ロンドン西部に位置する大学である。ブルネル大学は、幅広い分野の専攻があり、特に工学系での評価は高い。2021年度イギリス大学ランキングでは、ブルネル大学が88位で順位付けています。受け入れ先のKaiCheng教授は、ブルネル大学の先端製造&企業エンジニアリング（AMEE）部門の部門長を務めている。

筆者は平成30年7月にブルネル大学で開いた国際会議「nanoMan2018 6th International Conference on Nanomanufacturing」に参加し、論文を発表した。そのときに、泊まったホテルは大学キャンパス内で位置しており、大学のキャンパス生活を少し体感することができた。とても幸運で、KaiCheng教授の研究室、及びブルネル大学の先端製造&企業エンジニアリング（AMEE）部門の見学ができ、交流も深めることができた。技術交流はもちろんですが、将来的には大学間交流関係を達成できる可能性も期待される。



大学キャンパス



学生の創作活動様子

3. 研究概要

(1) 複雑微細加工の現状について

近年、半導体製造装置用部品、光学部品、バイオテクノロジーなど様々な分野で精密部品の微細化への需要が拡大しており、それらの発展に伴い、工作物表面をナノレベルかつ高効率に仕上げる精密研磨技術が求められている。

(2) 実験装置と実験方法

オンラインでの海外派遣事業の支援を受けて、さらに教育研究費を加え新たな微細加工の実験装置を設計・製作した。実験装置の外観写真及び拡大写真を図1に示す。

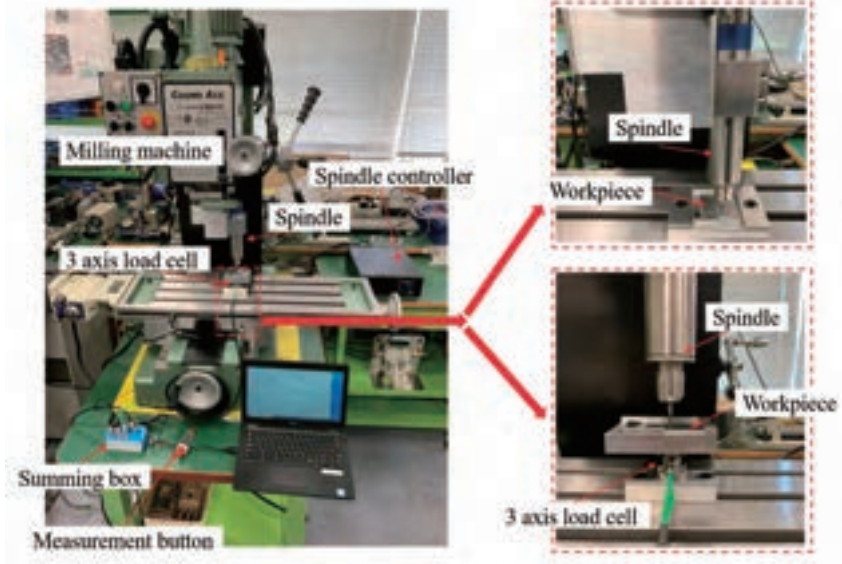


図1 実験装置の外観写真及び拡大写真

微細加工を実現するために、工具の直径が1mm以下（0.02mm、0.1mm、0.5mm等がある）の場合には高速回転運動が必要とする。図1に示したように、フライス盤の主軸に高速スピンドルを取り付けた。高速スピンドルはテクノナカニシ（株）が製造した製品を利用し、工具が直径の0.02mm、0.1mm、0.5mm、1mmなど数種類を準備した。また、工作物の下方に、3成分力センサーを取り付けた。これによって、加工中の3方向力の変化を観察することができるようになった。

(3) 実験条件と実験結果

実験条件を表1に示す。今回の実験では工作物がアルミニウム合金を利用した。工具は無限コーティング2枚刃エンドミルMSE230を用いた。工具の回転数が1000rpmから30000rpmまでそれぞれ設定して実験を行った。実験結果は図2、図3、図4に示す。今回の実験条件では回転数の最適値が10000rpmであることを明らかにした。今後はさらに詳細な実験を行い、そして磁気援用加工法を利用して加工精度を向上できることを期待される。

表1 実験条件

Parameter	Conditions
Workpiece	Aluminum alloy
Rotation speed (rpm)	1000, 5000, 10000, 15000, 20000, 25000, 30000
Tool	MSE230-1 (φ 1)
Feed rate (mm/min)	200
Depth of cut (mm)	0.10

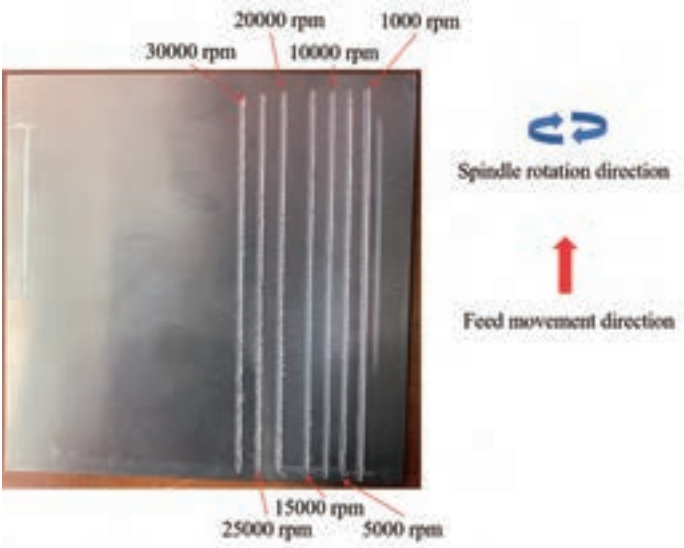


図2 工作物加工後の外観写真

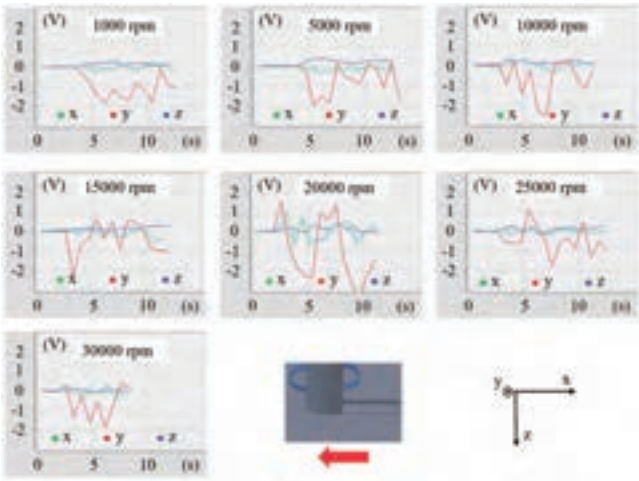


図3 各回転数で加工中の3方向力の変化プロフィール

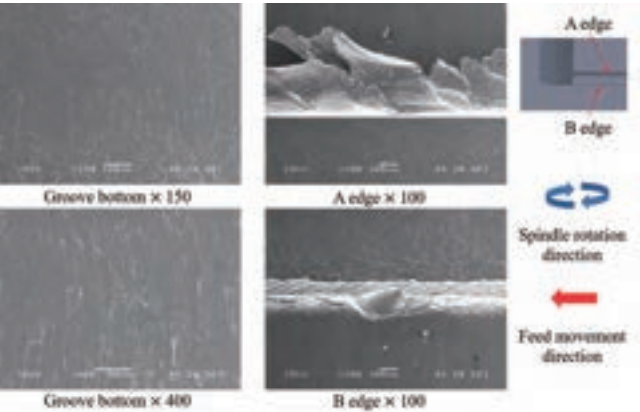


図4 加工後溝部と溝両側の拡大写真（回転数 10000rpm）

謝辞

今回行えた研究を通して、海外最先端の研究者との共同研究ができ、新しい研究テーマを取り入れることができた。研究を進めるにあたって協力してくださったブルネル大学のKaiCheng教授に感謝いたします。また、このような研究の機会を提供してくださった宇都宮大学ダイバーシティ研究環境推進本部をはじめとする宇都宮大学関係者の皆様に心より感謝致します。

松井貴子

まつい たかこ

国際学部・国際学科・教授



チェコの定規／オロモウツのハイパーマーケットで見つけたもの



チェコ

派遣先機関

パラツキー大学

派遣先期間

令和2年10月1日から令和3年3月31日まで

住所

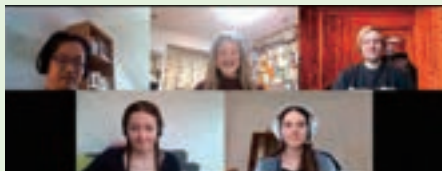
Křížkovského 511/10 771 80 Olomouc

研究テーマ

- ① 国際的ボディメソッドの日本語教育への応用
- ② 市民活動としての俳句創作に関する比較文化研究

◎ オンラインでの海外派遣事業のよかった点がありますか？

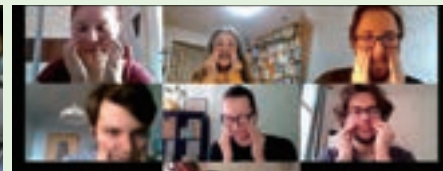
オンラインの可能性を実感できたことが一番です。そして、何より、派遣先であるチェコのパラツキー大学にいらっしゃる渡辺隆行先生のご厚意とご尽力を頂くことができたからこそ、オンライン派遣事業を遂行することができたのだと思っています。オンラインでの実施となったとき、まず考えたことは、時差の問題でしたが、チェコは朝、日本は夕方となる時間帯に設定することで、クリアすることができ、アジアだけでなく、ヨーロッパともオンライン交流ができる可能性を確信しました。この確信のもと、国際学部が行う協定校とのオンライン交流について、令和2年度にはタイに限定していたものを、令和3年度はアジアからヨーロッパに拡大して、タイとチェコの両方で実施します。



セミナー／渡辺隆行先生と



学生セミナー／骨模型



学生セミナー／固有受容感覚刺激

チェコの日本語教師、学習者の方々と6回のセミナーを行い、考察を進めました。人体模型を使い、能を謡う、ユニークな試みです。

◎ オンラインでの海外派遣事業のやりにくかった点、苦勞したことはありますか？

当初は、授業のない8、9月に派遣の予定でしたが、コロナのために派遣中止となり、ほぼ諦めていたところに、10月からオンラインで実施になりました。後期の通常の業務をこなしながら、新たに、オンライン用に研究計画を作り、改めて派遣先と相談し、打合わせを重ねて、新しい計画を実施して年度内に終わることは、とても大変なことでした。

◎ 研究者としての今後の目標

今回のオンライン派遣によって、パラツキー大学との交流を再開することができました。チェコへは、10年ほど前に、能と俳句を教えに何度か出かけていましたので、オンライン派遣では、それを土台として、解剖学に基づくボディメソッドを応用し、そこに、日本の伝統芸能である能の謡を加えて、日本語教育の新たな方法を探究することにつながりました。チェコの日本語教師の方々から頂いたご教示を活かして、日本語の音声教育がより充実するように貢献できたらと考えています。俳句については、チェコで市民活動として行われている俳句活動（尾形祐美氏とパベル・ヤンシュタ氏が創出し、運営しているチェコ人主体の月見草句会）に参加することができ、研究者としてだけでなく、俳人としての活動の場が広がりました。月見草句会のお二方には、6月に、尾形祐美氏「南チェコでことばについて考えるーチェコ人が楽しむ句会月見草を主催して」、パヴェル・ヤンシュタ氏「巡礼と俳句ー中欧・エルサレム・広島から長崎へ」というタイトルでオンラインでの講演をお願いして、チェコと日本の学生たちが、国際交流、海外体験する場を作ることができました。今回のオンライン派遣によって得た新たな可能性を、今後も引き続き、探究していきたいと考えています。



9月句会／午後の陽



9月句会／焚火

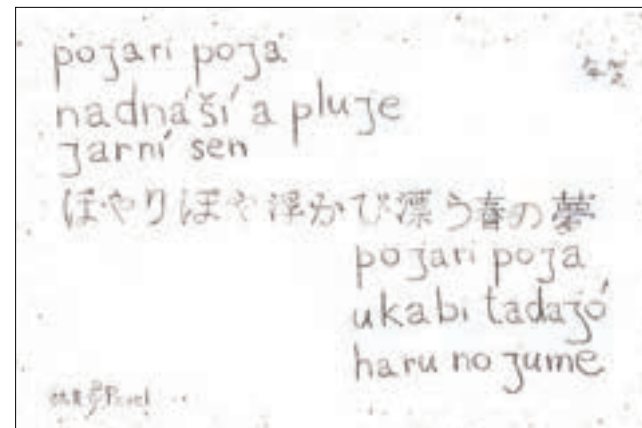
チェコで規制がやや緩和された夏休みの8月に、吟行をして、9月に屋外での句会が開かれていました。渡航派遣が実現していれば、私も参加していたはずの句会です。2枚の写真から、それぞれ1句ずつ作りました。

9月 午後の陽の青葉をわたる焚火句会
夏夕焚火の照らす輪の丸き

南チェコの澄んだ空気が木々の間を通り、太陽がゆっくりと西の空に留まっている夏の暮方、夏日に代わる焚火の明るさと温もり、句会の輪の中に自分も入っているように感じられて句を作りました。時間と空間を超えて共有した感覚です。

◎ 将来留学を考えている人達へ

海外には、日本を研究する人たち、日本語を学ぶ人たち、日本に関心を持っていて、日本のことを知りたいと思っている人たちが、たくさんいます。留学先では、他人からの借り物の知識ではなく、自分の実感や経験に裏打ちされた日本、現実に存在する自分の日本を、自信を持って伝えてほしいと思っています。



オノマトペが効いた俳句のお年賀（祐美さんとパヴェルさんから）

オンライン留学先から先生へ

パラツキー大学渡辺隆行先生から
当初の予定では、夏休みの期間にチェコに来られることになっていて、学生への直接の指導は難しいと考えていたのですが、オンラインでの実施になったことで、チェコの日本語教師会のメンバーだけでなく、パラツキー大学の学生に加えて、プラハのカレル大学の学生たちも対象にしたセミナーを開催できたのはありがたかったです。ただ、学期中で授業の合間の開催だったため、参加人数がそれほど増えなかったのは残念なことでした。今回の経験を生かして、これまでは考えもしなかった形での国際協力を進めていきたいと考えております。

月見草句会の尾形祐美さんから
チェコ人のメンバーの詠んだ俳句に、俳句やコメントでお返事をいただくという形で、翻訳を通してですが、俳句で直接コミュニケーションをすることができ、月見草にとつてとても豊かな経験となりました。チェコに渡航することができないと知った時は、とても残念でしたが、このような文面での丁寧なやりとりは、オンラインならではのことであったので、結果的にとても良かったと思います。いつかチェコでお会いできるのを、月見草一同、楽しみにしております。

能と俳句と日本語と

松井貴子(教授)
MATSUI Takako
国際学部 国際学科
mtaka@cc.utsunomiya-u.ac.jp



1. はじめに

世界的なCOVID-19の感染拡大のために、渡航派遣が中止になりましたが、今回のオンライン研究では、学生時代から親しんできた能と俳句を活かすことができました。この二つの伝統文化は、前近代から近代を経て、現代まで継承され、いずれも日本語に深くかかわっています。俳句は、日本発祥の文学として海外で受容されて国際化し、能は、2008年にユネスコの無形文化遺産になっています。能を身体教育として応用し、日本語教育に活用した新たな試みの報告です。

2. 派遣先と派遣期間

オンライン派遣期間：令和2年10月1日～令和3年3月31日
国・派遣先機関：チェコ共和国・パラツキー大学

3. 研究概要

I 身体感覚を磨く日本語の音声教育

留学生たちを指導してきて、適切な発音教育が必要であることをずっと感じてきました。日本語教育では発音は必ずしも重視されず、国語教育でも発音を学ぶことはありません。チェコでは母語の発音教育が確立しています。日本語でも、ただ真似るだけではない効果的な発音教育が必要であると思います。

1 日本語の発音教育

言葉を発するためには構音器官を使って声を出しますが、その声を作るのは呼吸と姿勢です。解剖学をもとに身体の機能をイメージして改善するボディメソッドと演劇の基礎訓練を応用することを試みました。姿勢、呼吸、構音がポイントです。自分に意識を向けて、どのように身体を使っているか認識することから始めて、自分の発音をどのように変える必要があるか理解し、どのように発音するか意識して発音して、うまく発音できたときの身体の使い方を把握し、言語化して記録する。このように発音練習の手順を細分化しました。

人体は、骨格が身体の形を作り、筋肉が骨をつないで動きを作り、内臓器官が体幹を満たして支えています。筋肉(背筋、胸筋)を緊張させるのではなく、内臓の存在をイメージして、その質量感で支えを得ることで、楽により姿勢を取ることができます。呼吸器の構造と、横隔膜や肋骨の機能を知り、呼吸によって起こる動きを手で感じることで、自然に姿勢が変わります。姿勢と呼吸の準備ができてから、母音の構音を、「あいうえお」(口を開ける方向が非連続で変化が大きく言いにくい)ではなく、「いえあおう」(口の動きの変化に自然な連続性がある)で練習します。日本語教師の先生方は、人体模型は初めて見る感じで、好奇心を持って見つめ、骨格、筋肉、内臓器官(体幹)のとらえ方を新鮮に感じながら、呼吸が起こす肋骨の動きを感じて、よい姿勢を見つけていました。そして、このように身体を使う実践的学習は、楽しめるとの評価を頂きました。

2 チェコの日本語教育

チェコ語は第一音節(最初の母音)にアクセントを置いて、一音一音が比較的明瞭に発音されます。発声には、胸部から頸部(喉)、頭部が一体化して使われて、比較的強い息が喉を通ります。喉を開いた発声が、頭部に共鳴して、口腔内を広く使って構音されます。

チェコ語の母語話者が日本語を発音するときには、息が通ること、発音が明瞭であること、共鳴があることは、日本語にも活かれます。その一方で、発話時に強いアクセントがあると、日本語としては違和感のあるものになり、チェコ語の強弱アクセントの癖が、日本語の音のゆらぎとなり、聞き取りにくくなります。口腔の奥まで使う音も、日本語として異質な音に聞こえます。日本語弁論大会の出場者にも、一音ごとの強さや長さが不均等になることや不要な強勢アクセントがありました。

チェコの日本語教師の方々と活発な意見交換を通して、チェコ人の日本語発音で改善が必要な点を明確にすることができました。その一つが母音の無声化です。母語話者の関西方言では、文末の「す」を明瞭に発音し、無声化しません。無声化するときは、呼吸の流れは続いているが、口の形が「う」から解放され、明瞭にするときは、息のある間、口の形が保持されています。チェコ人の日本語では、「ひと」の母音が無声化ではなく無音化して、「ふと」のような音になります。無音化するときは、口の形が「い」になりません。口の形を明確に「い」にして、声帯を振動させないことで無声化できます。

また、チェコ語母語の耳で促音や高低アクセントを聞いても、認識できないので、第一言語のように、耳で聴いた音を真似て発音を習得することが難しいと伺います。だからこそ、身体感覚を使うこと、自分がどのように構音器官や他の身体部位を使ったときに、母語話者が聞いて違和感のない発音になったか、自己観察し、その身体感覚を言語化して認識することが有効になります。

3 日本語教育と能の融合

日本語では、子音はいつも母音と一緒にです。5つの母音を正確かつ明瞭に発音することが重要になります。チェコ人の日本語は、拍を均等にし、アクセントを平坦に近づけることで、格段に聞き取りやすくなります。能謡は、母音の明確な発音、拍の均等化、強弱の平準化、高低の意識的コントロールを身につけるのに効果的な教材になると考えました。能は、八拍で七五調を謡いますが、感覚的な理解の助けとして、西洋音楽で音符の長さが様々に異なって連なっても、常に一定の拍子が刻まれていることが応用できます。入門曲「鶴亀」の詞章を一字ずつ丁寧に発音してから、一節、一文につなげて謡い、一拍一音の感覚を体得するために、自分で机や腿を叩いて拍を打つことを同時に行いました。通常の日本語の授業では、単語、フレーズや文、文章のままりで一気に読み、一音ずつ発音を練習することはないので、一音ずつ発音するのは、新しい経験です。

能謡の準備として、身体の構造をイメージできるように骨模型を使い、自分の身体に意識を向けて呼吸して、息の力が体幹の内部を伝わるのを感じて、母音を発音します。そして、音が上昇するとき、喉が上に広がり、息が鼻に行く、音が下降するとき、喉が下方に広がり、息が口から出る、という構音器官の動きを知ることが、強弱から高低のアクセントへ意識的に移行することにつながります。謡の音程は、地声の音域で最も出しやすい高さを自分で決めることができます。音の高低を、ゆっくり、長い音で発音して、自分の身体の使い方、音の高低に対応した変化を、チェコ人学生たちは、それぞれに気づいて発見していました。細やかな感覚を呼び覚ますには、構音器官の固有受容感覚を刺激することが有効です。不正確な発音は、構音器官の使い方、動かすタイミングや順序、力の入れ具合、息の強さなどを、ほんの少し修正する提案をするだけで、すぐに改善が見られました。うまく発音できているというと、とても嬉しそうなる表情をするのが印象的でした。

すべての日本語を正確に発音する必要はなく、必要な時に、必要なだけ正確な発音ができれば、円滑にコミュニケーションできます。意識すれば日本語らしく発音できるようになることが大切であると思います。チェコ人は、日本人より呼吸が深く、音を共鳴させて強く出せるので、日本語として自然な深さ、強さを知って、最適に調整できることを日本語学習の目的の一つとすることが、実践的に使える日本語の習得につながり、さらには、日本人以上に深い響きのある日本語を習得できるだろうと期待しています。

II 南チェコの俳句活動

日本の俳句は、19世紀頃から翻訳を通して外国に紹介され、現在では、日本国外で俳句創作を楽しむ外国人がたくさんいます。パラツキー大学の学生に俳句を教えたとき、「公園にホームレス死んだ雪降る」という句を作った学生がいて、息をのむほど感動しました。チェコ人の俳句は哲学的です。それは俳句の本質につながります。

1 ヴォドニャニ月見草句会

パラツキー大学の渡辺隆行先生から、南チェコのヴォドニャニで俳句活動をしている尾形祐美さんをご紹介頂き、俳句について様々に考える機会を得ました。祐美さんは、月見草句会を創立主宰し、パヴェル・ヤンシュタさんと運営して、チェコ人会員と句会を開いていらっしゃいます。句会ごとに発行される句会報には、高評価を得た句と句会や吟行の写真が掲載されていて、和やかに俳句を楽しんでいらっしゃる様子が伝わってきました。祐美さんが句会を始めるきっかけとなった、パヴェルさんが参加した俳句のワークショップは、写真を見て句を作るものであったそうです。絵本作家でもある祐美さんは、ご自身の絵から俳句を作るワークショップや季節を題として句を作る句会を試み、定期的に句会を開く月見草句会を始めたそうです。俳句研究者であると同時に俳人でもある私は、月見草句会の写真に刺激を受けて、句を作りました。



5月句会／
ブルーベリー
どちらのピースに
載せようか



5月句会／
構えとは人に向くもの聖五月
ガラス瓶とレース透けゆく風光る



6月句会／
句を作るうつむく角度バラ一輪
ひとかけのケーキ残して夏句会



6月句会／
白壁の日影にひっそり額団扇
句を作る輪になっている夏灯



7月句会／
夏冷ゆる小舟操る濁河



7月句会／
權一本命懸けるか夏大河



7月句会／
地に坐して背丈と同じ夏の草



7月句会／
夏灯句を語り合ういつもの輪

2 月見草句会との俳句交流一空間を超える

月見草句会の会員はチェコ人です。日本のことを知らないけれど、俳句に興味を持ち、面白そうだと思って、チェコの俳句をチェコ語で作っています。日本の俳句の約束事である有季定型を五七五の定型は、チェコ語の音節で数えるのではなく、感覚的に同じ量の内容になること、三行にすることとし、有季は、自然と季節のことが盛り込まれていることとしています。これは、私が、英語の俳句について考えた有季定型と同じでした。句会では、俳句創作で最も大切な「自分の体感であること」を重視して、題詠と雑詠をします。そして、他の人の句や日本の先人の句を読んで、意見交換し、俳句の感覚をつかむことを句会の楽しみとしています。私の俳句研究と創作の経験をもとに、俳句についての質問に答え、句評を差し上げて、会員の皆様に、とても喜ばれました。ヴォドニャニでは、お気に入りのカフェに集まって句会をしていましたが、コロナ禍では外出、集会が制限されて、メール句会になりました。私は、日本語で作った句をチェコ語に訳して頂いて投句しました。以下が、そのときの句会報に載せられた高句点句です。

10月 枯葉落つわたしの魂の底まで Dáša Franková
SUCHÝ LIST/DOPADL/AŽ NA DNO MÉ DUŠE
恋人たちバーで朝食落とす卵 Jana Šídllová
MILENCI Z TINDERU/V ROHU BARU SNÍDAJÍ/ZASTŘENÁ VEJCE
11月 暖房が冷えきり蜘蛛も巣を畳み Zbyněk Mrvík
TOPENÍ V MÉM POKOJI/VYCHLADLO/V PAVOUK BALÍ SÍTĚ
祖母と祖父温かい靴下暖房の側 Marcela Linhartová
BABÍČKA A DĚDA/V TEPLÝCH PONOŽKÁCH/U TOPENÍ
1月 初雪の降る止む融ける眠る間に Takako Macui
PRVNÍ SNÍH/PADAL, PŘESTAL A ROZTÁL/BĚHEM SPÁNKU
2021年1月の句会では、私の句が特選句に選ばれて、とても嬉しいことでした。関東地方の初雪が、私が寝ているうちに、降って、止んで、融けて、と、すべて終わっていました。先行句の「はじめての雪闇に降り闇にやむ」(野沢節子)を思いながら作った句です。
雪被り薔薇の実飛び上がる鳥 Pavel Janšta
ZASNĚŽENÉ ŠÍPKY/BLÍŽÍM SE/VZNESLI SE PTÁCI
3月 年寄りの躑きたるクロッカス Jarda Klimeš
STARÝ MUŽ/STĚŽÍ POKLEKÁ/KE KROKUSU
夜の街動くのと信号だけ Dáša Franková
V NOČNÍM MĚSTĚ/JDU JEN JÁ/A SEMAFORY
冬を逐ふ光強きものそれが春 Takako Macui
HONÍ ZIMU/A JEHO SVĚTLO JE SILNÉ/TO JE JARO

3月の句会では、3位に選んで頂けました。チェコの春を想って作った句です。チェコの春は、気温が急上昇するのが印象的で、それは、日射しが強くなることでもたらされる春なのです。

3 チェコ季節の模索と、これから

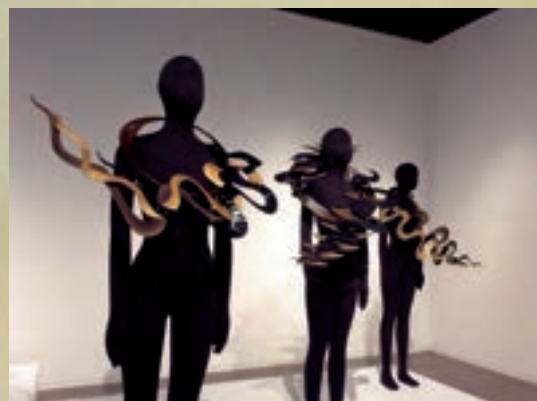
日本の季節は京都の気候を基準にしているため、そのまま外国で使うのは難しいことがあります。自然な動きとして、月見草句会でも、チェコ歳時記を自分たちで作るべく、チェコの季節感に合わせた季節を集めています。昨年、チェコの夏の季節語として集められた季節語には、日本の季節語と共通するものがあります。チェコで夏が来たことを感じさせるものは何か?という問いをたてて、夏を感じるものや事柄を、自由に思いつくまま、個人の経験に基づいて挙げていって、他者の季節感を受容し、議論しながら共有することで、チェコの季節感が確立されて、日本の季節感との共有感覚を得ることが可能になるだろうと期待しています。

オンライン研究期間終了後も、月見草句会との交流が続いています。俳句には読むたびに、解釈、鑑賞、評価が変わるという特質があり、日本の俳句とチェコの俳句の同質性と異質性、季節感を共有できる可能性など、探究する課題がたくさんあります。研究と交流の広がりと発展の確かな手応えを感じています。

松島さくら子

まつしま さくらこ

共同教育学部・教授



作品 elements series
みる、ふれる、きくアートー感覚で楽しむ美術 Touch is Love,
栃木県立美術館



タイ



ミャンマー



ベトナム

派遣先機関

チェンマイ大学 他

派遣先期間

令和2年12月～令和3年3月31日

住所

78/2 Sirimangalajarn road T.Suthep Maung
Chiang Mai, Thailand

研究テーマ

漆工芸を通したアジア伝統工芸の現状と課題

◎ オンラインでの海外派遣事業のよかった点はありませんか？



作品 inherent elements II
漆、麻布、竹、白蝶貝、鮑貝 金箔、金粉

アジアの伝統工芸である漆工芸の造形表現、及びアジア各地の漆工芸比較研究を行っている。

当初、渡航し調査研究を行う予定であったが、2021年3月までの現地渡航を断念し、派遣先大学等研究者とオンラインによる研究調査とその記録映像作成を行いアーカイブ化し、当該分野の国際ネットワーク交流基盤をオンラインにて整備することとした。2020年初頭からの新型コロナウイルスの影響により海外の大学でもオンラインによる授業や研究の経験を重ねてきたことや、オンラインであるからこそ取り組める内容に変更したことにより、現地研究者もこの取り組みを理解し支持してくれた。



作品 leaves
ユーカリの葉、漆、麻布、金粉、金箔、貝

◎ オンラインでの海外派遣事業のやりにくかった点、苦労したことはありますか？

派遣先大学等研究者へ調査業務依頼を行い、資料収集した。彼らも日常の大学の業務や他にも研究を行っており、限られた期間での調査研究になるため、日程の調整に苦慮した。また、新型コロナウイルスの影響により各国の地区間の移動が制限された時期があり、解除されるまで待機せざるを得なく、調査を予定通り進められない箇所があった。また、ミャンマーでの調査記録を開始するため現地研究者との連絡を密にとり、準備をしていたが、新型コロナウイルスの影響だけでなく、2月1日のミャンマー国軍による軍事クーデターにより、インターネット接続が制限され、オンラインでの連携がスムーズに行かなくなり、調査研究も中止せざるを得なくなった。予想がつかないことであったが、情勢が不安定な国での研究の困難さを感じている。

◎ 研究者としての今後の目標

2022年に開催を予定している「世界のうろし-装飾と造形-」展覧会・シンポジウムでの、共同研究成果の発表をはじめ、国内外へ研究成果と宇都宮大学の取組を発信したい。当該専門分野における柔軟で多彩な教育や研究のあり方を模索し、女性や多様な人材が能力を発揮できる機会を広げることで、イノベーションを生み出し、新たな価値を創造することを目指し、このコロナ禍において思惟している。

◎ 将来留学を考えている人達へ

自身の専門分野に関する美術工芸や民族工芸を探索するために、海外の工芸産地や美術館、民族文化の調査をスタートしたのが約30年前。単独でアジアの山岳地域や辺境の遺跡などを訪れた。最初は旅行の延長であったが、次第に現地の研究者や工芸に関わる人々の交流を通し、育んできた友情に支えられ、研究事業を継続することができている。人々との出会いが研究の継続と深化の原動力になっており、人生の宝である。



ミャンマージェン州での民族工芸調査 (2007年)



タイチェンマイ大学での交流事業 (2016年)



ミャンマー漆芸技術大学での交流事業 (2017年)



ベトナム国立美術館での交流事業 (2016年)



2005年より継続しているミャンマーの漆芸技術大学での交流活動の様子 (2014年)

漆工芸を通したアジア伝統工芸の現状と 課題 オンラインでの活動

松島さくら子(教授)
Sakurako Matsushima
宇都宮大学 共同教育学部
sakurako@cc.utsunomiya-u.ac.jp

1. はじめに

本研究では、交流を継続してきた派遣先大学研究者と共に、経済変化の大きい東南アジア各地の最新の漆工芸現状学術調査を行い、その成果（調査記録と提案作品）を国際展覧会にて展示し、さらにアジアの漆工芸文化の記録・現状をもとに未来への提案を行う予定をたてていた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大の収束の見込みがたたないため、2021年3月までの現地渡航を断念し、派遣先大学等研究者とオンラインによる研究調査とその記録映像作成を行いアーカイブ化し、当該分野のオンラインによる国際ネットワーク交流基盤を整備することとした。

2. 活動期間

オンライン派遣期間：令和2年12月1日～令和3年3月31日

国・派遣先機関：タイ王国／チェンマイ大学

ミャンマー連邦共和国／漆芸技術大学・ミャンマー漆器協会

ベトナム社会主義共和国／漆画家グループ・ハノイ工芸研究所ほか

3. 研究概要

漆樹は日本・韓国・中国・東南アジア・ブータンに分布している。その幹に傷をつけ得られる樹液を採取し、天然の塗料や接着剤として使用してきたのが漆工芸である。筆者は漆工芸の分野において、漆造形研究として作品制作、そして1990年代よりアジア漆工芸の研究を中国・東南アジアの漆工芸産地を訪れ調査研究を行ってきた。

伝統工芸は人々の生活に根ざした必需品として生まれ伝承されてきたものであり、時代の変化に伴いその存在価値や本来の機能が変化することは自然な流れであるが、アジアの漆工芸産地では職人の高齢化により廃業に至るところや、人々の関心が薄れ、次世代に継承していくことが困難な状況を目にした。そこで工芸教育や技術交流を通し文化の担い手となる人材の育成が、アジアの当該地域において、そして日本においても急務であると考え、2005年にアジア漆工芸学術支援事業（任意団体）を立ち上げ、東南アジアを中心に技術公開やワークショップなど、漆工芸職人や制作者とともに、宇大生や国内の芸術系大学生と現地の学生との多国間教育交流活動を通し、若い世代に漆工芸文化の魅力を伝える支援を行ってきた。

しかしながら東南アジアの当該地域では長期間にわたり、情勢不安やインフラが整わず、漆工芸に関する周辺国との研究や情報の相互交流や共有が少なく、自国のコミュニティーの中での生産活動にとどまり、行き詰まった状況が続いていた。教育交流活動のみならず、東南アジアの漆工芸の現状把握と現状に至るまでの歴史を学術的に調査し、派遣先大学の工芸教育に関わる教員とともに、現在のグローバルな生活や価値観にあった漆工芸の可能性を提案し国際社会にアジアの漆工芸の魅力を広く発信していく必要があると考えた。この国際ネットワークを交流基盤とし、持続的に交流し研究していくことで、各地の伝統工芸産業振興と新たな観光資源の創出に繋がると考えている。

本研究では、派遣先大学研究者とオンラインによる研究調査とその記録映像作成を行いアーカイブ化することで、国際ネットワーク交流基盤をオンライン整備し、持続的な多国間教育交流活動の充実に向け、地域及び各国の伝統工芸産業振興と新たな観光資源の創出モデル、歴史的記録としての意義もある。

4. 研究日程

2020年12月1日-2021年3月20日

タイ王国

チェンマイ大学のSumanatsya Voharn氏の協力のもと、以下の取材を行った。

- チェンマイの漆芸活動家・漆芸職人を訪れ、その歴史、産品と漆芸技術について、伝統工芸継承の取り組みへの取材
- オムコイ県のポーカレン族村での漆掻きと民族の漆器生産取材
- バンコクの漆芸家、螺鈿産地の取材
- オンラインにて調査の資料整理とビデオアーカイブ資料作成

2021年1月1日-2021年3月20日

ベトナム社会主義共和国

漆画家のTrinh Tuan氏の協力のもと、以下の取材を行った。

- ハノイを中心に、ベトナム北部の漆産地・民間の漆研究施設・美術館等の文化施設の調査、及びビデオ映像記録
- オンラインにて調査の資料整理とビデオアーカイブ資料作成



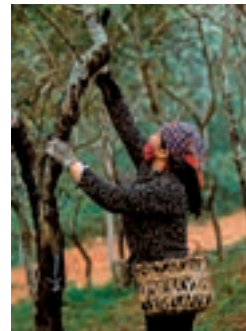
オムコイ県のポーカレン族による漆掻きの様子



ポーカレン族の漆器制作の様子



チェンマイ市内の伝統工芸継承の取り組み



ベトナム北部 プートー県での漆掻き調査
マスクをして漆掻きをする職人



調査を手伝ってくれた漆画家グループと漆掻き職人



ハノイ市内の漆制作工房にて技術調査

2021年1月1日-2021年2月1日

ミャンマー連邦共和国

Myanmar Lacquerware Association会長のU Maung Maung氏、Lacquerware Technology College（漆芸技術大学）の協力を得て、ミャンマーの漆器産地・民間の漆生産調査、及びビデオ映像に記録すること予定し打ち合わせと一部の調査を開始していたが、2月1日のミャンマー国軍による軍事クーデターにより、活動を中止した。

5. コロナ禍での各国の現状

当初の計画では、タイとミャンマーを中心に調査をし、ベトナム、ラオス、カンボジアへの渡航を考えていた。タイとベトナムは、水際対策をはじめとする封じ込め政策で感染を最小限に封じ込めることができていた。両国とも国内移動の行動制限がかけられたが、個人消費や輸出は回復の兆しが見えている。漆器産業に関しては、観光産業との関わりが大きく、近年生産が減少していたことに加え、観光業の回復の兆しが見えない状況が続いている。

カンボジアにおいても、感染者数を低く抑え込んでいたが、2021年3月には市中感染が相次いで確認された。アンコール遺跡観光をはじめとする外国人旅行者によるインバウンド収入は絶たれ、ホテルや観光客向けのレストランは次々に休業となり、国内経済は厳しい状態が続いている。シェムリアップを拠点とし、漆器や漆によるインテリア装飾品など幅広く制作を行ってきた工房には、かつて20名ほどのカンボジア人職人がいたが、新規の漆器の受注や販売が断たれ、工房を閉鎖せざるおえなくなった。

ミャンマーは、2020年9月以降、感染者数が徐々に増えていた。ミャンマー最大の漆器産地であるバガンには、代々漆器作りに携わり、数十人の職人を抱える規模の大きな漆器屋も多い。ミンカパー村をはじめとするバガン地域の村々では漆器を制作する民家が並び、盛んに漆器生産が行われ、国内外の観光客が寺院の参道や漆器店で漆器を求める姿をよく目にしたものだ。2019年には「バガンの考古地域と記念建造物群」が世界遺産に登録され、今後益々漆器産業が活気づくと期待していた。しかし、近年観光化が進み、物価の上昇とともに、生漆等の原材料の高騰も著しい。職人が漆器作りをやめ観光業や他の職業に転職する傾向にあり、人材確保が難しくなってきた。変化する生活様式を反映し、伝統的な漆器の販売が減少の傾向にあった。そこに、新型コロナウイルス感染が深刻な状況となり、国内外の観光客が見込まれず、漆器産業の継続が危ぶまれるような状況が続いていた。さらに2021年2月1日に起こった軍事クーデターにより、民主政権を支持する国民のデモや抗議活動がミャンマー全域に及び、国軍による残虐な弾圧で複数の犠牲者が出る惨事となり混乱した状況が続いている。

現在も、ミャンマー漆器関係者とは通信が断続遮断された状態である。自由に互いの国を行き来し、学生たちが漆芸による交流を通し、未来について夢や希望を語り合うことができる平和な日が一日も早く訪れるよう祈るばかりである。

今後、渡航可能な条件が整い次第、取材ができなかった、ミャンマー、カンボジア、ラオスの取材を実行したいと考えている。また活動の一部は、野村財団、ユニオン造形文化財団、ポーラ美術振興財団からの助成を受け継続する予定である。

ビデオアーカイブは以下のURLより閲覧可能

アジア漆工芸学術支援事業 <http://asian-urushi.com>

6. 謝辞

新型コロナウイルスの感染が広がる中、一時は断念していた研究活動であります。宇都宮大学ダイバーシティ海外派遣事業による支援をいただき、オンラインによる研究活動を実施することができました。関係各位に心より感謝申し上げます。また、タイではチェンマイ大学のDr.Sumanatsya Voharn氏、ベトナムではTrinh Tuan氏と漆画家グループ、ミャンマーではU Maung Maung氏はじめ、厳しい規制の中、研究に賛同し現地調査にご協力いただいた皆様には、御礼申し上げます。



カンボジアのシェムリアップで開催した交流と調査活動の様子（2018年）

熊谷 朋子

くまがい ともこ

就職・キャリア支援センター・准教授



カナダ

派遣先機関

ランガラカレッジほか

派遣先期間

令和2年12月7日～令和3年3月31日

住所

100 West 49th Avenue Vancouver
B.C.Canada V5Y 2Z6

研究テーマ

高等教育機関におけるキャリア教育の取組みと組織運営にかかる日本・カナダ 2 国比較研究
ーグローバル人材の育成に向けてー

◎ オンラインでの海外派遣事業のよかった点はありますか？

オンライン研究という新たな研究スタイルに挑戦する機会を与えていただき、そしてこれまで継続して支援いただいたことにとても感謝しています。本研究に対しては2018年の時点で2020年の8月～9月にかけてカナダへの派遣を承認いただいておりましたが、派遣が承認されてからの約2年間は本事業で取組む研究のテーマに常に向き合い続けることができました。そして2020年以降はCOVID-19で世界的に教育および研究のスタイルが変わった節目の年にオンライン研究という新たな研究スタイルに向き合い模索しながら研究を続けていくことができました。この経験は今後の研究のあり方を考えるうえで大きな財産になりました。

海外渡航が難しいということになった後も、ダイバーシティ研究環境推進本部や学内の担当部署の皆様が何とか研究を継続できるよう代替案を検討いただいて研究へのモチベーションが途切れないようにしていただいたことが何よりありがたく感じておりました。「オンラインでの海外派遣事業の良かった点」という視点とは少々のが外れるかもしれませんが、研究活動はこのような組織の支えがあって成り立っていることや、想定外の状況におかれたときにもその時々でできる研究を継続し続けることの大切さを今回のことを通して改めて気づくことができました。そして、研究を継続できたことで「社会が大変な状況だからこそ研究を通して社会にその成果を還元したい」という気持ちを強く持つことができました。ありがとうございました。

◎ オンラインでの海外派遣事業のやりにくかった点、苦労したことはありますか？

今回の私の場合は時差が課題になりました。研究の対象地域としたカナダのBC州と日本の時差は約16時間あります。今回実際に通常の業務と研究の両立という点ではオンライン研究に切り替える際もその点は懸念材料になりましたが、今回に限らずカナダを対象としたオンラインの研究を行ううえでは今後も私の切り離せない課題に変わりありませんので、オンラインに切り替えました。研究活動を進めるうえでの障害もないことは稀なことだと思います。今回も予想外のことに向き合いながら、その時出来る最善のことに挑戦してみて自分なりに解決方法を見つながら進めることの大切さを経験しました。

◎ 研究者としての今後の目標

今回の事業で支援いただいたことで、さらに研究を進めたいと考え本研究内容を引き継ぐ形で2021年度の科研費基盤研究 (C) に申請し採択していただくことができました。研究の幅を広げていききっかけを与えていただき大変感謝しています。今後もカナダ全体とブリティッシュ・コロンビア州を中心とした調査研究を進め、広く研究成果を社会に還元できるように努めて行きたいと考えています。今回の事業を通して準備期間も含めいつもカナダの高等教育研究に気持ちを向けて過ごすことができたことが私にとって有意義な時間になりました。それは多くの方の支えがあったからだと思います。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

高等教育機関におけるキャリア教育の取組みと組織運営にかかる 日本・カナダ2か国比較研究 ーグローバル人材の育成に向けてー

熊谷 朋子(准教授)

Tomoko Kumagai

宇都宮大学 就職・キャリア支援センター
t-kumagai@cc.utsunomiya-u.ac.jp

1. はじめに

大学生のキャリア教育や就職支援を通して青年期の発達段階における大学の果たす役割やキャリア形成に大きな影響を与える国境を越えた学び方や働き方への移行および高等教育の制度設計に関心を持ち研究を続けています。

今回の事業期間を通してこれまでの研究を見直し、そして今後の研究の方向性を明確にできた有意義な期間だったと感じています。

以下研究の概要を報告いたします。

【研究の背景、目的】

日本では長年にわたり新卒一括採用、終身雇用および年功序列賃金制度により企業組織内で人材の育成がなされてきたことは周知のとおりですが、COVID-19の影響もあり日本での新卒者のキャリア形成のあり方も変化が求められていました。COVID-19以前は日本のみならず世界中で留学生数も増加の一途を辿り、各国では受入れ体制や卒業後の社会への接続等について制度設計がなされてきています。そして2018年2月にユネスコの「高等教育の資格の承認に関するアジア太平洋地域規約」(東京規約) が発効され、現在は日本、オーストラリア、中国等12か国が締結しています(2021年5月現在)。今後ユネスコは世界規約の発効を目指している状況であり、世界規約と地域規約が並走することも予測されるなど、国境を越えた学びや働き方が柔軟にできる状況にシフトしています。

そこで、高等教育の国際的な質保証のための国や個々の高等教育機関における制度設計やキャリア教育の取組みや企業等との連携の在り方について先進的な取組みをしているカナダを調査対象国として比較研究を行い、高等教育機関新しい視座を開くことを目的として取り組みました。

2. 派遣先と研究期間

オンライン研究期間：令和2年12月7日～令和3年3月31日

国・派遣先機関：カナダ・ランガラカレッジほか

これまで蓄積してきた研究を引き継いでBC州の早期学習からK-12、高等教育機関の制度設計や各高等教育機関の取組みや組織体系や教職員組織、キャリア教育プログラムの変遷や、企業との連携等について文献やカナダ政府や州、および教育機関等の公的データおよび情報収集に加えオンライン等で情報収集を行いました。



カナダ BC州最大都市 Vancouver (2019.4 撮影)

3. 研究概要

カナダはロシアに次ぐ世界第2位の国土を有し10州3準州からなる連邦政府です。教育制度は各州準州が管轄し運営をしています。カナダは国の経済の安定と発展のため毎年多くの移民や留学生を受入れ、多様な価値観が共存しながらそれぞれの良さを活かせるよう制度を整えてきています。特に教育面では優秀な人材を受入れるための留学生に対する制度設計が整備され、多様な文化が共存しつつも教育水準を維持し発展しています。ユネスコのリスボン承認規約に加盟する前の1990年代の早くから高等教育資格を活用した留学生等の受入も制度設計を進めてきた背景があります。BC州は毎年いわゆるK-12の段階から中等後教育に至るまで世界中から多くの留学生を受入れしています。そして州内には高い研究レベルを有している大学もあり世界中から学生が集い多様性のなかでの柔軟な学び方のシステムが構築されています。ブリティッシュコロンビア大学をはじめ世界的にも質の高い教育、研究環境が整えられています。さらに近年幼児期のStrong Start BCプログラムからK-12の教育システムの見直し、さらにK-12の卒業要件にキャリア教育の単位必修化を取り入れるなど多民族、多様性のなかのキャリア教育や教育の質の向上に力を注いでいます。そこでBC州における高等教育を中心に各種の制度設計について日本との比較研究をおこなうことで国境を越えた柔軟な学び方、働き方についての制度のあり方の課題を明らかにし、グローバル人材の育成に向けた課題と方向性を明らかにしたいと考えました。

BC州の州都はビクトリアですが最大の都市はバンクーバーです。豊かな自然と古くからの建造物が残されていますが北米最大都市としてアジア・太平洋地域と北米を結ぶ拠点としての都市機能も非常に発達しています。その社会の安定と経済の発展のために教育には大変力を入れており、国内外からの留学生の受入や、留学生としての派遣等についても様々なニーズに応じた支援策が整備されています。BC州の教育省の学校教育の目的は「教育を受けた市民」の育成を使命として各教育機関との連携、学びの接続や学びと働くことへの接続の制度設計が進んでいます。

州内には公立の中等後教育機関が25校あり、うち総合大学は11大学設置されています。

州政府は1960年代からカレッジの機能強化を進め1980年代からカレッジから研究大学への編入システムの体制を整え、現在では履修したコースを次の学びの機関へ繋げるTransfer SystemがBC州の教育の質の高さと安定した経済を支えています。さらにカレッジでは継続教育、生涯学習、成人教育等のコースも開講しておりBC州の教育の充実、学びの接続においてカレッジが果たす多岐に渡る役割を確認できました。



(2019.4 撮影) Vancouver 公立図書館外観 美術館外観

4. まとめ

本研究を通してBC州内の高等教育機関への接続方法、母語を英語としない学生への教育制度の整備、海外留学生の受入体制や成人教育、また中等教育の卒業要件にキャリア教育が組み込まれていること、高等教育機関卒業と一定期間の在留資格があることなど単に学ぶだけではなく「教育を受けた市民」として社会で活躍するための接続方法も整備されていることが明らかになりました。今後は制度設計に至った背景をさらに研究し、同時に広くコミュニティカレッジや海外の学修歴の承認システム等の研究を進め、多様な学び方や働き方を可能とする制度設計のあり方を明らかにしていきたいと考えています。

5. 謝辞

今回このように研究を継続させていただくために制度を導入いただきご支援いただきました宇都宮大学ダイバーシティ研究環境推進本部の皆様、関係部署の皆様、旧キャリア教育・就職支援センターの歴代のセンター長等には大変お力添えをいただきましたことにこの場をお借りして心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

高山道代

たかやま みちよ

国際学部・国際学科・准教授



チェコ

派遣先機関

パラツキー大学

派遣先期間

令和3年3月

住所

Krizkovskeho 511/8, CZ-779 00 Olomouc,
Czech Republic

研究テーマ

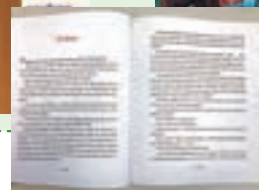
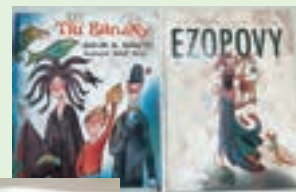
チェコ語の名詞語形と文法教育

◎ オンラインでの海外派遣事業のよかった点がありますか？

現地派遣は実現しなかったが、研究協力者に恵まれ、オンライン調査がおこなえたこと。

◎ オンラインでの海外派遣事業のやりにくかった点、苦労したことはありますか？

長期の渡航計画が立てにくい状況にあったことから一か月程の調査渡航を予定していたが、新型コロナウイルスの影響で渡航中止となった。通常の授業や学務等をおこないながら研究を進めることとなり、時間確保の面で非常に苦心した。授業期間終了後の数日間に集中的にとりくみ、何とか実施できたが、十分な調査は実施できなかった。また、スラブ語やスラブ語史関係の専門書や資料が国内では入手できないものが多く、この点についても苦心した。



◎ 研究者としての今後の目標

プラハ言語学サークルの活動のスラブ語学研究やスラブ語史研究への影響、および、大学教育やその他の文化活動の諸側面における継承のされかたについても現地調査をおこないたい。また、日本語研究への影響についても検討してみたい。

◎ 将来留学を考えている人達へ

オンライン研究は工夫次第で可能であるが、現地でしかできない調査がある。状況が改善し、海外渡航が可能となる日ができるだけ早く訪れることを願う。

語彙と格語形との関係性における チェコ語と日本語との対照

高山道代（准教授）
TAKAYAMA Michiyo
宇都宮大学 国際学部
mtakayama@cc.utsunomiya-u.ac.jp

1. はじめに

チェコ共和国の公用語であるチェコ語はスロバキア語、ポーランド語、ソルブ語とともにスラブ語派の西スラブ語群に属している。一見したところ、日本語との関係性は希薄なようであるが、ロマン・ヤコブソン (Roman Jakobson) がチェコスロバキア (当時) で1926年に結成したプラハ言語学サークルの研究成果の影響は現代の日本の言語学においても、特に文法理論の研究領域において顕著にみとめられる。その代表的な研究の一つが名詞語形の体系的な研究といえる。こうしたプラハ言語学サークルの研究成果が言語学研究やその他の文化活動の諸側面においてどのように継承されてきたのかについて、チェコでの現地調査と資料収集をおこなうことが本研究の当初の目的であった。

残念ながら、渡航中止となり上述のような調査は叶わなかったが、日本国内での文献調査およびオンライン調査を通して、今後の研究の方向性のある程度見出すことができた。今回の調査が現地調査として実を結ぶことを切に願いながら報告させていただく。

2. 派遣先と派遣期間

オンライン派遣期間：令和3年3月 (20時間)

国・派遣先機関：チェコ共和国・パラツキー大学

古代日本語における名詞の主語標示と対象語標示に対応する現代チェコ語の用例を収集し、それらの格語形の様相について古代日本語との対照をおこなった (調査1)。また、現代日本語の名詞の主語標示と対象語標示について、それぞれの用法に関する調査表を作成し、パラツキー大学教養学部 (Faculty of Arts) アジア研究科の渡辺隆行先生に協力いただき、対応する現代チェコ語の格語形について調査をおこなった (調査2)。現在、これらの調査結果をもとに分析をおこなっている。

3. 研究概要

現代日本語との突き合わせについては分析が十分にできていないことから、本報告では現代チェコ語と古代日本語の主語標示および対象語標示に関する対照分析について述べたい。

チェコ語の名詞の格語形については一般に、文法性が3種類 (女性、中性、男性) あり、各文法性に複数の変化型があるため14種類の変化型をもっているとされる。さらに、各変化型には2種類の区別 (単数/複数) があり、7種類の格語形 (主格、与格、対格、呼格、前置格、造格) をもつことが知られている。これらの格語形において、語形変化のタイプにおける一般的な語群を辞書類、単語集から抽出し、筆者がこれまでにおこなった古代日本語の主語標示、対象語標示機能をもつ名詞の語形変化に関する調査結果との突き合わせをおこなった。数日間という短期間での調査となったため、サンプリング的な調査となったものの、現代チェコ語では、男性名詞単数の無語尾硬変化型における活動体名詞と不活動体名詞とを比較すると、不活動体名詞では1格 (主格) と4格 (対格) に接尾辞非付与形態が用いられるのに対して、活動体名詞では接尾辞非付与形態は1格においてのみ用いられ、4格では接尾辞付与形態が用いられていることが確認できた。古代日本語では不活動体名詞の1格に相当する主語標示と4格相当の対象語標示に接尾辞非付与形態が用いられる傾向があり、もう一方の活動体名詞の場合には主語標示、対象語標示ともに助辞付与形態が用いられる傾向があることがこれまでの研究から明らかになっており、両言語の格語形のシステムには差異が認められるものの、語彙的な活動体/不活動体の在り方と格語形との対応関係に共通性が確認できた。

▶男性、無語尾硬変化型不活動体名詞 (単数)

主格	生格	与格	対格	呼格	前置格	造格
stůl (机)	stolu	stolu	stůl	stole	stole/ stolu	stolem
jazyk (言語)	jazyka	jazyku	jazyk	jazyku	Jazyku/ jazyce	jazykem

▶男性、無語尾硬変化型活動体名詞 (単数)

主格	生格	与格	対格	呼格	前置格	造格
syn (息子)	syna	synovi/ synu	syna	synu	synovi/ synu	synem
vnuk (孫)	vnuka	vnukovi/ vnuku	vnuka	vnuku	vnukovi/ vnuku	vnukem

4. 謝辞

研究の受入れの当初から、渡航中止となりオンライン調査に切り替えた後まで、終始、相談にのってください、調査協力くださいましたパラツキー大学の渡辺隆行先生に心から御礼申し上げます。

また、現地での研究計画の大半が実施できなかったことは大変残念でしたが、オンライン研究の機会を提供していただき、変更後も柔軟に対応くださいました宇都宮大学ダイバーシティ研究推進本部、また、本研究に協力いただいたすべての方々に感謝申し上げます。



パラツキー大学

立花有希

たちばな ゆき

国際学部・国際学科・講師



ドイツ

研究期間

令和2年4月1日から令和3年3月31日

研究テーマ

ドイツにおける異文化間教育

ドイツにおける異文化間教育

立花有希（講師）

Yuki TACHIBANA (Lecturer)

宇都宮大学 国際学部

tachibana@cc.utsunomiya-u.ac.jp

1. はじめに

近年、日本では、外国人児童生徒数の増加、また日本語指導の必要な児童生徒数の増加を受けて、外国人児童生徒教育の充実が重要課題として広く認識されるようになってきている。ドイツは同様の課題を数十年ほど先行して経験しており、そこでの研究および実践の蓄積から得られる示唆は少なくない。ドイツでは、この分野は主に異文化間教育 (Interkulturelle Pädagogik) とよばれ、義務教育段階のみならず、就学前教育から職業教育、教員養成、社会教育に至るまで幅広い領域で取り組まれてきた。その展開と現状を確認することにより、これから日本で求められる施策につながる視点を得ることにしたい。

2. 研究期間

研究期間：令和2年4月1日～令和3年3月31日

3. 研究概要

(1) 基礎とする資料

ドイツの異文化間教育分野を概観するのに現時点で最も適した文献は、2018年に刊行された „Handbuch Interkulturelle Pädagogik“ (『異文化間教育ハンドブック』) であると思われる。筆者は、同書の日本語訳書刊行 (2021年秋予定) に向けて、ドイツを専

門とする3人の研究者と共に翻訳、調整を進めているところである。同書は、異文化間教育を考える上で重要な概念・取組について、132人の執筆者 (うち5人が編者) が112項目にまとめたもので、全606ページからなる事典的性格の一冊である。この書を読み解くことによって得られた観点について、以下に整理することにした。

(2) 異文化間教育の重要概念

ドイツにおける異文化間教育の端緒となったのは、1960～70年代に増加した外国人労働者の子どもへの教育的対応であった。そこからさまざまな理論・政策・実践が展開されてきたが、そこで着目すべきは、非均質性 (Heterogenität) という語である。Heterogenität の対概念はHomogenität (均質性) であり、この両者は異文化間教育の理論を支える重要なタームとなっている。ドイツの異文化間教育研究の第一人者であるゴゴリン (Ingrid Gogolin) は、2019年に東京で開催された世界教育学会での基調講演においても、この観点から学校教育の特徴を語っている (2019年8月6日)。それによれば、近代化と共にあった学校教育の確立期にはHomogenität=均質性が目指された。そのために現代の学校も多分にその性格を負っている。しかもそのことには無自覚であることが多い。この無自覚性を自覚するには、学校教育に「ハビトゥス」(Habitus) として「埋め込まれた」(eingebettet, 英語ではembedded) 均質性志向に気づかなければならない。そして、Heterogenität=非均質性が社会的現実であり、教育の前提であると認識される必要があるというのである。

(3) 翻訳における語義の重なりとずれ

翻訳作業を通じて、ドイツ語での議論において、どのような場面でどの語が用いられているかに対する意識が高まった。その代表的な例が、移住／移民に関わる語の数々である。国境を越えてドイツに入国する人々をめぐる動向を考えると、「移動」という行為・現象を表す語にはMigration [(人の) 移動、移住]、Zuwanderung [(他国からの) 移住]、Einwanderung [(他国・よその土地からの) 移住、来住、入植] があり、「移動」の主体・当事者を指す語としては、Migrant (女性形はMigrantin) [亡命者、移住者、Zuwanderer [(他国からの) 移(住)民]、Einwanderer [(他国・よその土地からの) 移住者、移民] といったものがある ([] 内に独和辞典による訳語を添えた)。一方、日本語の「移民」を辞書で引くと、「個人あるいは集団が永住を望んで他の国に移り住むこと。また、その人々」(大辞泉) と説明されており、行為と主体とが同じ「移民」という語で表されることが確認される。ゆえに、ドイツ語でいうところの「移住背景のある生徒」(Schülerinnen und Schüler mit Migrationshintergrund) に対して、「移民背景のある生徒」という訳語をあてることも誤りではなく、さらにいえば、そこにはおそらくstudents with migrant backgroundsという英語表現から先に定着していた「移民背景のある生徒」の影響もあると考えられる。同様に、ドイツの政府機関である連邦移民難民庁 (Bundesamt für Migration und Flüchtlinge) についても、定訳となっている日本語表現からはうかがえないが、原語の表記は行為・現象を表すMigration (移住) と主体・当事者を表すFlüchtlinge (難民) が使われていることに気づかされるのである。

(4) 考察

ドイツの経験に照らして日本での研究・実践・政策を考えれば、外国人児童生徒教育が依然として対症療法的で、前提となる社会観、学校観を共有するための歴史的・社会的な議論が十分でない。「移民問題」も「移民」の問題としてではなく、「移住」社会の問題として認識されなければならない。

参考文献

Gogolin, Ingrid/ Georgi, Viola B./ Krüger-Potratz, Marianne/ Lengyel, Drorit/ Sandfuchs, Uwe (Hrsg.)(2018): Handbuch Interkulturelle Pädagogik. Verlag Julius Klinkhardt: Bad Heilbrunn.





アメリカ

派遣先機関

ロチェスター大学

派遣先期間

令和2年10月15日～令和3年3月31日

住所

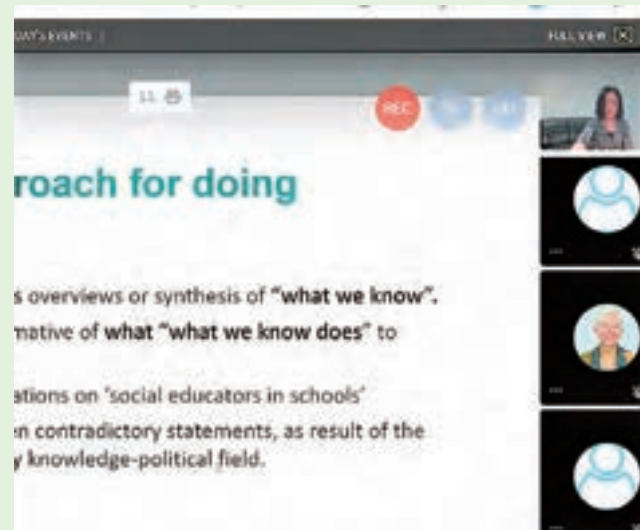
500 Joseph C. Wilson Blvd., Rochester, NY
14627 U.S.A.

研究テーマ

Rethinking Multicultural Education in Japan:
Lessons from the United States
(アメリカ多文化教育の現状と日本の学校教育への教訓)

◎ オンラインでの海外派遣事業のよかった点はありますか？

It would not be possible for me to conduct this research if I were not allowed to do it online during the Covid-19 pandemic. I am deeply grateful to the board members and the staff at Initiative for Realizing Diversity in the Research Environment at Utsunomiya University for providing me with an online research environment. This research began in August 2019 when I visited Rochester, New York and I was supposed to return to Rochester to resume it in April 2020. However, the pandemic had started. When I was wondering how I could continue this research, the university's policies on online research lighted my way in the dark and guided me through this pandemic.



Presenting at the 2021 Virtual Meeting of the American Educational Research Association

◎ オンラインでの海外派遣事業のやりにくかった点、苦勞したことはありますか？

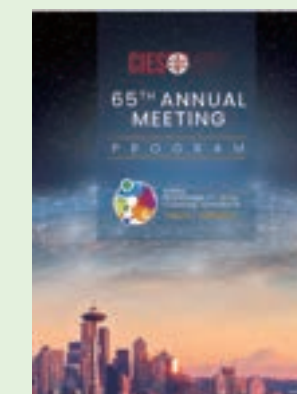
It has been a difficult and challenging time for everyone around the world. Sometimes it seems hard to find a light at the end of the dark and endless tunnel even though my computer screen is so piercing.

◎ 研究者としての今後の目標

As a scholar, I am interested in expanding on my research topics and more actively publishing research results domestically and internationally in the future. As an educator, I will focus my attention to both curriculum design and students themselves. I believe the purpose of education is not only to teach academics but also to enable students to question the status quo which we have taken for granted in our everyday life, and to explore intellectual issues within the framework of humanistic values.



Interactive Presentation Gallery, 2021 Virtual Meeting of the American Educational Research Association



Program, 65th Annual Meeting of the Comparative and International Education Society



Program, the 8th Trans-Pacific International Conference.

◎ 将来留学を考えている人達へ

I strongly believe the following to be universally applicable. First, scholarly works in academia are not imaginary but disciplinary, based on critical reading and exploration. Coincidentally and ironically my undergraduate advisor, Yulin Chu, my master adviser, Yasunori Okochi and Ph.D advisor, Tom Popkewitz said the same thing: if you went to write one good page, you have to read at least 10,000 pages of good scholarly writing. Second, it is essential for leaders at educational institutions to have distinct visions and capabilities to carry out their missions as "it takes ten years to grow trees but a hundred years to rear people." Skepticism and critical thought is needed with regard to curriculum design because education is not merely for the society in front of us but for the future society. Last but not least, as a person, kindness is of the highest importance. Imagining others' pain and sympathizing with others' feelings are more crucial than ever. Ignorance, arrogance and lack of imagination are dangerous. I am wishing you all the best and much success wherever you are in the world.

Rethinking Multicultural Education in Japan: Lessons from the United States (アメリカ多文化教育の現状と日本の学校教育への教訓)

戚傑(教授)
Jie Qi
宇都宮大学 国際学部
jq1@cc.utsunomiya-u.ac.jp

1. はじめに

Globalization and its far-reaching effects have shaped the formation of citizenship and schooling. Since the Japanese government began promoting "internationalization" in the 1980s, slogans such as "international exchange," "cultural exchange," and "understanding of other cultures," have become de jour expressions among policy makers and educators. The belief that Japan has become a multicultural society is widespread, and multiculturalism as an innovative theme has developed broad appeal. This is a continuation of research conducted from August to September 2019. The purpose of this research project is to consider how postcolonial theory enables us to rethink Japanese language education for immigrant children in Japanese schools as well as the Japanese conception of multiculturalism by critically examining and questioning the approach taken in the United States.

2. 活動期間

オンライン派遣期間：令和2年10月15日～令和3年3月31日

国・派遣先機関：アメリカ・ロチェスター大学

3. 研究概要

The objective of this research is to explore how postcolonial theory enables us to problematize the Japanese versions of multicultural education and multiculturalism and to rethink multicultural education in Japan. Postcolonial studies have come to recognize the saliency of including the particularities of each point of contact between different cultures and histories in analysis. Since the end of World War II, Japan has been politically, economically, militarily and culturally influenced by the United States to a high degree. The Americanized version of democracy has been transformed and practiced in Japan. Multiculturalism, the product of democratization and globalization, has also been advanced and developed in Japan. Postcolonial studies emphasize the necessity of incorporating the particularities of each point of contact between different cultures and histories, e.g., each individual in a society is a hybrid of their unique set of affinities, bringing practices from the diffuse spheres of their life into a single person. When Japan meets the United States of America a bilateral exchange occurs and a hybridized "third space" is formed. This study argues that globalization as well as the conceptions of multicultural education and multiculturalism have created a pattern of hybridization in Japan. Conditions and locations of social and cultural exclusion have their reflection in symbolic conditions and locations of cultural exchange. Foucault's notion skepticism also enables me to rethink the notion of multicultural education and multiculturalism in Japan. Different types of discourse accept and make different types of knowledge. It is dangerous to be deluded by the literal sense of words. Instead of determining what kind of knowledge is good or bad, we have to be aware that any knowledge can be dangerous. The role of researchers is not to simply elucidate knowledge and truth, but to problematize the present situation in order to understand what has been constructed as the notion of multiculturalism and multicultural education and to think about how the "truth/knowledge" which has been implanted and inscribed has come to be regarded as natural, unquestioned, and unquestionable.

Two different methodologies are applied in this research. The first methodology of this study includes field work which I conducted in Rochester, New York, USA from August to September 2019. The second is a critical textual analysis. Data is included from literature including government documents, America and Japan's standard curriculum, and school textbook, teachers and school administrators. This study concludes by pointing out that the differences between Japanese and American educational policies and pedagogical approaches to teaching immigrant children have resulted in different outcomes for immigrant children. Dissimilar notions of multiculturalism in Japan and the United States of America have discursively constructed the notion of successful immigrants, respectively.

The following is a partial listing of the research outcomes that have been published and presented:

- Book*
Hybridization, Classification and Transformations of Multiculturalism and Multicultural Education. In W. Zhao, T. Popkewitz and T. Autio (Eds.), "Epistemic" Politics of Knowledge "Translation" in International Educational Studies (in press). Routledge.
- International Conferences*
 - The 8th Trans-Pacific International Conference.
 - 2021 Virtual Meeting of the American Educational Research Association.
 - 65th Annual Meeting of the Comparative and International Education Society (virtual).

Acknowledgements

I would like to express my deepest appreciation to everyone who initiated the project, *Initiative for Realizing Diversity in the Research Environment* at Utsunomiya University, which enabled me to conduct this research virtually. I would also like to extend my sincere appreciation to the Department and colleagues for kindly allowing me to take a research leave.

ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業（先端型）活動報告

はじめ～これまでの歩み～

本学は、平成24年に男女共同参画推進室を設置して以来、学内の男女共同参画意識の醸成と共に、女性研究者の仕事とライフイベントの両立支援に取り組んできました。

そして、平成25年度「文部科学省女性研究者研究環境活動支援事業」に採択され、3年間の事業に取り組んだ結果、女性教員比率の上昇につながりました。

こうした取り組みが評価され、平成30年度「文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」に採択されました。

新事業の採択に伴い、組織を再編して「ダイバーシティ研究環境推進本部」を立ち上げました！

取組み概要(令和5年度まで)

※平成30年度～令和2年度の中間評価をもとにまとめています。

女性教員採用の加速化

- ◆宇都宮大学教員人事方針「女性の若手教員を優先する」
- ◆公募要領への記載「業績が同等の場合は女性を優先して採用」
- ◆女性限定公募「学長戦略経費による女性教員採用特別制度」

目標1→女性教員比率21%

目標2→女性教員採用比率30%(H30～R5年度の平均)

研究力向上のための重層的支援

- ◆女性キャリアパスプログラムを更新して研究力の底上げに資する諸活動ならびにリーダーシップ向上力策を展開
- ◆その成果を女性教員の上位職への昇進というアウトカムに結実

目標3→女性教員上位職階比率の向上(教授等18%、准教授等21%)

目標4→女性教員海外派遣制度の拡充

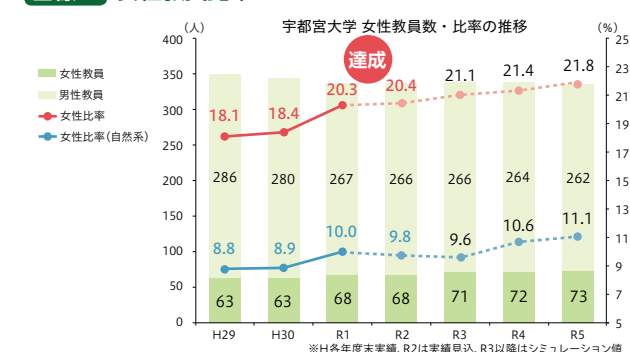
リーダー育成対策の拡充

- ◆管理職に必要な情報・スキルについて学ぶための女性教員対象リーダーシップ・プログラムの開発と実施

目標5→大学運営に関わる女性比率の向上(現状の15%の維持向上)

取組みに対する成果(現状)

目標1 女性教員比率 21%



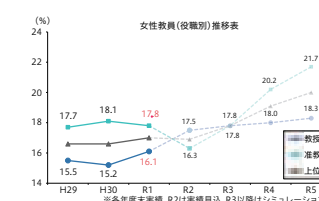
目標2 女性教員採用比率 30%(うち自然系を半数)

	H29	H30	R1	R2 (R3年1月1日見込み)
女性採用者数(自然科学系)	2(1)	5(1)	8(2)	4(2)
全体採用者数	12	11	13	16
女性採用比率(%)	16.7	45.5	61.5	25.0
備考	女性教員5名のうち1名(自然科学系)は、女性教員採用特別制度による。女性教員8名のうち6名(自然科学系2名を含む)は、部局独自の女性限定公募による。			

自然科学系未達成
令和2年度中に「女性教員採用特別制度」を活用し工学部で助教の採用を進めることを決定しました！

目標3

女性教員上位職階比率の向上(教授等18%、准教授等21%)

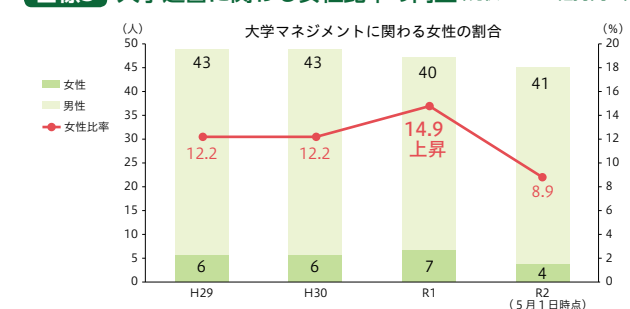


目標4

女性教員海外派遣制度の拡充

- 平成30年11月「女性研究者海外派遣制度」制定
- 海外派遣者
 - ・平成30年度 1名
 - ・令和元年度 10名
- 海外派遣者のうち4名が昇任

目標5 大学運営に関わる女性比率の向上(現状15%の維持向上)



宇都宮大学男女共同参画・女性研究者支援のあゆみ

ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）(2018年度～2023年度)

- | | | | |
|----------|---|----------|---|
| 2011年 4月 | 「宇都宮大学男女共同参画宣言」発表 | 2016年 1月 | 「メンター制度」開始
宇都宮市男女共同参画推進事業者「さけり賞」受賞 |
| 2012年10月 | 「男女共同参画推進室」設置 | 4月 | 本学の自主事業として女性研究者支援事業を男女共同参画推進事業として継続。託児支援制度の支援対象を職員にも拡大 |
| 2013年 8月 | 文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」に採択(2013年度～2015年度) | 9月 | 「とちぎ女性活躍応援団」運営団体・会員団体として登録 |
| 11月 | 「女性研究者キャリア支援室」設置 | 2018年10月 | 文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」に採択(2018年度～2023年度) |
| 2014年 3月 | 「ワークライフバランス相談窓口」設置 | 11月 | 「ダイバーシティ研究環境推進本部」設置
「女性教員海外派遣制度」開始 |
| 4月 | 「研究支援補助員配置制度」、「託児支援制度」開始 | | |
| 2015年 6月 | 「女性教員採用特別制度」開始 | | |
| 9月 | 「男女共同参画週間」開始 | | |

MEMO

女性研究者海外派遣報告書 No.3

編集・発行：国立大学法人宇都宮大学
ダイバーシティ研究環境推進本部
女性リーダー育成オフィス
発行月：令和3年11月
連絡先：〒321-8505
栃木県宇都宮市峰町350 5号館C棟3階
TEL・FAX：028-649-5151 (代表)
E-mail:gender@cc.utsunomiya-u.ac.jp
<http://diversity.utsunomiya-u.ac.jp/>

